

自然尿のみで確定し得た悪性リンパ腫の1例－細胞診材料有効利用の重要性－

静岡県立静岡がんセンター病理検査室¹⁾，静岡県立静岡がんセンター病理診断科²⁾

○仲田佐和子(MT)¹⁾，刀稱亀代志(CT)¹⁾，大野幸代(CT)¹⁾，椎谷裕之(CT)¹⁾，遠藤誠(CT)¹⁾，
角田優子(MD)²⁾

【はじめに】腫瘍の診断において，生検等ができず細胞診材料しか得られないことがあり，検体の有効利用が非常に重要となる．今回，自然尿を有効に利用することで確定に至った悪性リンパ腫の1例を経験したので報告する．

【症例】60歳代，男性．肺小細胞癌放射線治療，化学療法の約6年後，突然左顔面麻痺が出現し，前医受診した．画像検査で脳内に多発腫瘍を認め，小細胞癌の多発脳転移を疑って当院受診．緊急性が高く全脳照射を開始．前医のCTにて膀胱に多発結節が確認され，自然尿細胞診が施行された．

【細胞診】Papanicolaou標本(SurePath)とMay-Giemsa標本(Cytospin)において，核の濃染，著明に高いN/C比，核形不整を示す小型円形異型細胞を認め，悪性リンパ腫や小細胞癌を疑った．この時点でセルブロック用に自然尿の追加提出を依頼した．SurePath残検体からの免疫細胞化学では，LCA(+), CD20(+), CD3(-), MOC31(-), Synaptophysin(-), Chromogranin A(-)を示し，悪性リンパ腫・B細胞性と報告した．

【セルブロック】H&E標本では，N/Cの高い小型円形均一な腫瘍細胞が増殖しており，免疫組織化学では，CD20(+), CD79a(+), CD10(+), CD3(-), CD5(-), Ki67 95%以上，MYC(±, 40%), BCL6(±), BCL2(+, 100%)を示した．また，Break-apart FISHでは，MYC, BCL6, BCL2のいずれもSplit signalが検出された．以上よりHigh-grade B-cell lymphoma with MYC, BCL2, and BCL6 rearrangements (triple-hit)の確定診断となった．

【まとめ】自然尿をLBCやセルブロックを駆使して有効に利用することで早期の確定診断，治療に結びついた．限られた検体しかない場合でも，可能な限りの手段を尽くして診断することの重要性を再認識した症例であった．